

## オーディオ実験室収載

### スピーカーアキュライザーの導入(24) —アナログ対デジタル(9)—

#### 1. 始めに

前報(23)に引き続き、アナログ音源とデジタル音源の比較を行ってみます。

#### 2. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴方法

スピーカーアキュライザーSPA-7の設定条件は前報(2)に述べたとおりとしますが、ケーブルの接続条件を前報(14)のとおり替えています。

試聴音源はバッハのヴァイオリン協奏曲1番と2番に固定し、アナログ盤、CD、Spotify、STAGE+から選択します。

##### アナログ盤

ドイツグラモフォン 483 5219

ヒラリー・ハーン (ヴァイオリン)

ジェフリー・カーン指揮ロスアンゼルス室内管弦楽団

##### CD

ドイツグラモフォン 00289 483 5219

ヒラリー・ハーン (ヴァイオリン)

ジェフリー・カーン指揮ロスアンゼルス室内管弦楽団

##### ARCHIV UCCA-1100

ジュリアーノ・カルミニョーラ (ヴァイオリン)

コンチエルト・ケルン

##### DENON COCQ-84998

日下紗矢子 (ヴァイオリン) \*第2番のみ

ベルリンコンツェルトハウス室内オーケストラ

##### PHILIPS UCCP-1114

諏訪内晶子 (ヴァイオリン)

諏訪内晶子指揮ヨーロッパ室内管弦楽団

##### MEISTER MUSIC MM-3043

フェデルコ・グリエルモ (ヴァイオリン)

新イタリア管弦楽団

##### BEST CLASSIC TC016

ダヴィッド・オイストラフ (ヴァイオリン)

ダヴィッド・オイストラフ指揮ウイーン交響楽団

## Spotify

ヒラリー・ハーン (ヴァイオリン)  
ジェフリー・カーン指揮ロスアンゼルス室内管弦楽団  
ジャニーヌ・ヤンセン (ヴァイオリン)  
ヤン・ヤンセン他室内アンサンブル

## STAGE

ヒラリー・ハーン (ヴァイオリン)  
ジェフリー・カーン指揮ロスアンゼルス室内管弦楽団  
ジュリアーノ・カルミニョーラ (ヴァイオリン)  
コンチェルト・ケルン  
アンネ=ゾフィー・ムター (ヴァイオリン)  
ワレリー・ゲルギエ指揮フロンドン交響楽団,  
リサ・バティアシュヴィリ (ヴァイオリン) \*第2番のみ  
ラドスワフ・ショルツ指揮バイエルン放送室内交響楽団  
ダニエル・ロザコヴィッチ (ヴァイオリン)  
ラドスワフ・ショルツ指揮バイエルン放送室内交響楽団

### 3. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴結果

アナログ盤はLP-12、CDはEMT981、SpotifyはPC、STAGE+はPC経由で再生します。

ヒラリー・ハーンとジェフリー・カーン指揮ロスアンゼルス室内管弦楽団のアナログ盤は、2003年発売のもので、ヒラリー・ハーンの艶のあるヴァイオリンとすっきりと切れのよいバックの演奏の様相が以前と違ってきています。

ヒラリー・ハーンとロスアンゼルス室内管弦楽団のCDは、上記のアナログ盤のボーナスもので、これも以前の印象と違ってアナログ的な雰囲気音で、ソフトな印象に変わっており、アナログ盤との差が縮まっています。

カルミニョーラとコンチェルト・ケルンのCDは、演奏会で求めてきたもので、2013年の録音です。ガット弦のカルミニョーラとドイツ3大バロックアンサンブルのコンチェルト・ケルンの演奏で、クリアで切れ味のよい音です。カルミニョーラのノンヴィブラートの技巧に富んだ弓さばきが聴きどころです。

日下紗矢子とベルリンコンツェルトハウス室内オーケストラのCDは、演奏会で買い求めてきたもので、2012年の録音です。曲目は違いますが、演奏会の雰囲気はこのCDで伺え、いかにも正統派のバッハの演奏という印象で、コンサートマスターの日下紗矢子以下、小編成のアンサンブルのまとまりの良さを感じます。

諏訪内晶子とヨーロッパ室内管弦楽団のCDは、2005年の録音で、諏訪内晶子のストラディヴァイウスの切れがよく、ヨーロッパ室内管弦楽団も爽やかな演奏です。

グリエルモと新イタリア管弦楽団の CD は、演奏会で買い求めてきたもので、2014年の録音です。いかにもイタリアのバロックアンサンブルのような明るく派手な演奏で、バッハらしくなくイタリアのバロック音楽のような表情を見せています。グリエルモのヴァイオリンは、艶っぽく装飾音符を含めたような華麗な演奏です。

オイストラフとウイーン交響楽団の CD は、元音源は 1962 年の制作のようです。古いアナログマスターながら、最近のデジタル録音に劣らず、フレッシュな音です。ゆったり目のテンポでオイストラフが比較的編成の大きいウイーン交響楽団をバックに丁寧な演奏を聴かせてくれます。

ヒラリー・ハーンとロスアンゼルス室内管弦楽団の Spotify は、上記の CD よりは緻密さで若干劣るところがありますが、以前に比べれば、より粗さがとれてきています。

ジャニーヌ・ヤンセンとヤン・ヤンセン他室内アンサンブルの Spotify は、上記ヒラリー・ハーンとロスアンゼルス室内管弦楽団の Spotify と音質的にはよく似たレベルですが、ややおとなし目の音でしっとり聴かせるところがあります。

ヒラリー・ハーンとロスアンゼルス室内管弦楽団の STAGE+は、上記のアナログ盤、CD および Spotify と同じマスターのようで、聴き比べに興味を沸かします。ヴァイオリンのソフトな感触では、若干 CD に及ばないものの、音の切れ味や低域の分離は CD より明瞭です。

ヒラリー・ハーンとロスアンゼルス室内管弦楽団のアナログ盤、CD、Spotify および STAGE+の比較について言えば、以前より音質の格差が縮まっているように感じます。以前の印象では、アナログ盤>>CD>>配信の順でしたが、アナログ盤と CD の差が縮まり、CD と配信の差が縮まり、配信の中でも STAGE+は CD とあまり差がなく、CD やアナログにない特徴もあります。

カルミニョーラとコンチェルト・ケルンの STAGE+は、上記の CD 同じマスターのようで、聴き比べに興味を沸かします。演奏はもちろん同じですが、ガット弦の艶は若干 CD に及ばないものの、音の切れ味や低域の分離は CD より明瞭です。

ムターとゲルギエフ指揮ロンドン交響楽団の STAGE+は、ムターのヴィブラートの効いた耽美的なボウイングとゲルギエフ指揮ロンドン交響楽団のすっきりとした透明度の高い音の演奏です。

バティアシュヴィリとショルツ指揮バイエルン放送室内交響楽団の STAGE+は、収録が新しいだけあって、間接音も含めてステージ感がリアルです。

ロザコヴィッチとショルツ指揮バイエルン放送室内交響楽団の STAGE+は、いかにも 2001 年生まれの若いロザコヴィッチの勢いのある演奏で、くつきりはつきり系の音です。

#### 4. まとめ

収録年代と音源の種類と再生ルートが異なる音源が、一様にスピーカーアキュライザー導入以降、音質が向上し、アナログやCDやSTAGE+の音源のいずれもフレッシュな印象で聴けるようになっていきますし、STAGE+の音源もCDやアナログに迫る音質で聴けるようになっていきます。

以上